3ZC-6

思い出を用いた認知症者と家族介護者間におけるコミュニケーション支援

山崎 和紘　　仲谷 善雄†
立命館大学　　情報理工学部†

1. はじめに

近年、日本は超高齢社会となり、認知症高齢者は増加傾向にある。認知症の症状は病型によって異なるが、主な症状は中核症状と BPSD（Behavioral and psychological symptoms of dementia：心理・行動症状）に大別される。中核症状は記憶障害や見当識障害など知的機能面の低下が分類され、介護を行う上で大きな負担になる徘徊や幻覚などが BPSD に分類される。認知症になると何もできなくなると認識されがちだが、脳の機能面の低下は見られても感情面での低下はみられず、介護を行う際には十分な配慮が必要となる。そうした認知症者を支えている在宅介護者は認知症に対する知識不足によって試行錯誤したり、要介護者から目を離せず、日々の介護によるストレスが溜まりやすい環境にあるといえる。また、認知症や介護に対する社会的認識の低さなど、周囲の協力が得られにくいことも介護者の抱える問題のひとつである。

本研究では認知症者にとって最も身近な存在である家族との思い出の想起支援を行う。家族介護者は家族全員でその思い出を話題として語り合い、介護をひとりで抱え込むのではなく、協力して認知症に前向きに向き合う環境作りを支援する。また、ある思い出について認知症者と介護者のお互いが想起できない場合には社会的事象やその思い出に類似した情報を与えることで失った記憶を取り戻すきっかけを提供する。このような支援により、認知症者は記憶を取り戻せ、家族介護者は認知症者との会話や家族どうしのコミュニケーションをより活発にすることができる。

2. 研究動向

現在、携帯電話などモバイル機器やインターネットが発達しており、これらを利用した支援が注目されている。例えば、写真による移動ナビゲーションシステム [1]や遠隔対話支援システム [2]などがある。

① 写真による移動ナビゲーションシステム

従来の地図を用いた移動ナビゲーションは、道順を覚えられないだけではなく、方向感覚や移動における目印の認識などが難しい認知症者には有効ではない。写真やアニメーションを用いて強調し明示することで公共機関の利用手順や経路の把握が容易となる。

図 1　移動ナビゲーションの例

② 遠隔対話支援システム

TV 電話を用いることで遠隔からでも思い出の写真やビデオの表示を可能となり、在宅での回想法や対話を行える。施設に通う必要がなく、在宅での対話によって精神的な安定を図れるため、介護者の負担軽減になると考えられる。

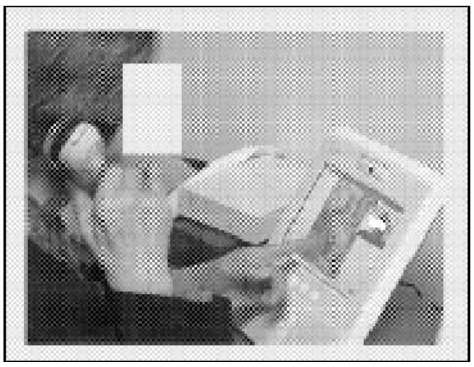

図 2　遠隔対話支援システムの例

Communication Support System between Dementia Persons and their Family by Utilizing Memories
†Kazuhiro Yamasaki and Yoshio Nakatani
College of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University

Copyright ©2012 Information Processing Society of Japan.
All Rights Reserved.

このような情報技術を用いた認知症者支援に共通する点は、自立した日常生活を送れるように支援をするということである。認知症者が自立した生活を送ることが可能になれば、介護者への負担の軽減に繋がると考えられているが、実際には介護者支援という目的での研究は数少ない。従来の研究では、在宅介護の否定的側面ばかりに注目し、認知症者の介護者は非認知症者に比べ負担感が高いとされていたが、最近では家族介護の価値や意義に肯定的側面からのアプローチが必要とされており、研究例も出てきている[3]。介護は誰もがいずれ通る道として受け止められている一方で、その負担の大きさに消極的になっていることが家族介護の現状である。社会制度としての支援体制の整備とともに、支援するシステムの研究開発が急がれる。

3. システム概要

本研究では写真を思い出想起のトリガーとして利用する。写真は認知症者にとって視覚的に理解でき、家族で会話を始めるきっかけとなりやすいと考えられるためである。

ユーザ(認知症者、家族、あるいは介護者)が写真とそのエピソードや場所、時期などの情報をセットにして写真情報データベース(DB)に登録しておく。写真を1枚選択すると、選択された写真の情報は、システムはその写真に関するエピソード、場所、時期の順番でユーザに提示する。これは、自分自身が経験した内容や繰り返し行った行為の記憶は比較的長く維持されるためである。

認知症者にとって登録された情報を見るだけで詳細な思い出を想起することは難しいと予想される。また、介護者もその写真に関するエピソードなどを記憶しているとは限らない。そこで、想起に役立つ情報として、関連する社会的事象の推薦や類似した情報を持つ登録済みの写真を表示することで想起支援を図る。事象DBに登録する内容は、時期が近い社会的ニュースや認知症者の趣味に関係する情報などの、思い出想起に効果があると思われる事象とする。

以下にシステムの利用方法を示す。また図3に本システムの構成イメージを示す

① 写真に関する場所や時期、エピソードなどの情報を登録する。
② 選択された写真の情報を提示する。登録されている情報だけでは認知症者の思い出想起に不十分である場合には、同じ場所や同じ時期の写真などの、類似した情報を持つ写真を提示する。
③ 認知症者と介護者の両者が記憶していない写真があった場合、または思い出想起に有用であると判断される事象が存在する場合には、事象DBに問い合わせを行う。
④ 問い合わせを行った結果を推薦する。
⑤ 写真の場所やエピソードのこと、推薦された事象に関して家族全員で語り合い共有する。新たな思い出が想起された場合には、その内容を写真情報DBに追記する。

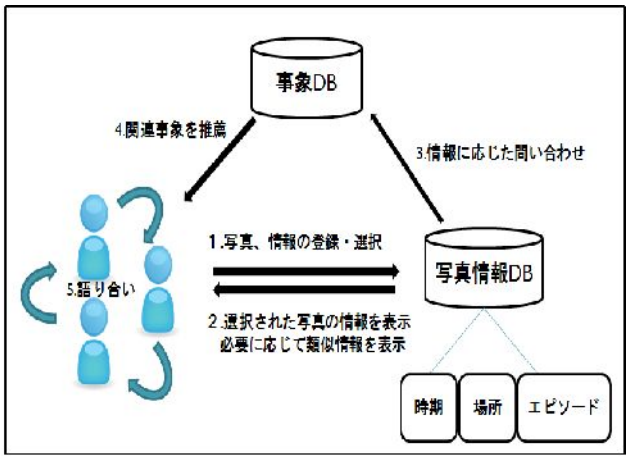

図3 本システムの構成イメージ

4. あとがき

今回は、写真とこれに付随する情報を用いて認知症者と家族介護者の思い出想起を試みるシステムを提案した。選択された写真と情報が類似する写真や社会的事象を推薦し表示することで思い出想起を支援し、これらを話題とすることで家族間のコミュニケーションの活発化が期待できる。

今後は実際に家族介護者と相談を行いながら構成の見直し・改良を重ね、このシステムの有効性を検討する。

参考文献

[1] 桑原教彰ほか：認知症・記憶障害の方のためのスケジュール支援システムの研究、第24回人工知能学会全国大会、CD-ROM、2010.
[2] 桑原教彰ほか：TV電話とコンテンツ共有を用いた高齢者への遠隔からの対話や回想法を可能とするシステムの実現と評価、ヒューマンインターフェース学会論文誌、Vol.9、No.2、pp.111-122、2007
[3] 樋口京子ほか：家族介護者の「介護に対する評価」の構造に関する研究、日本福祉大学健康科学論集、Vol.12、pp.39-48、2009.

Copyright ©2012 Information Processing Society of Japan.
All Rights Reserved.